
東方結界伝

らとそる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方結界伝

【Nコード】

N4482Y

【作者名】

らとそる

【あらすじ】

ある日のこと、学校から帰った主人公は、なぜか家に侵入していた謎の金髪女性に以下略。

だってここまで書いたら大体展開読めるでしょ？

東方二次小説

です。キャラ崩壊が含まれるので、原作が大好きという人は閲覧注意。

プロローグ（前書き）

初投稿作品。駄文になるとは思いますが、それでも構わないって人はどうぞ。

プロローグ

そこは、紅い部屋だった。

赤ではない。赤よりも鮮やかな紅い部屋。

天井も壁も、カーテンもカーペットも紅いその部屋の中央に、1人の少女がやはり紅い椅子に座っていた。

退屈そうに机に頬杖をつくその少女は、ふと何かに気付いたかのように目を見開く。

そして、にやりと笑うと右手を振り上げて指を鳴らした。

「お嬢様、お呼びですか？」

突如メイド服の女性が現れた。

指を鳴らしてから約二秒で登場というあり得ない現象ではあったが、少女はそのことを気にも留めていないようだ。

「ええ、ちよっとおもしろいものが見えたのよ」

「おもしろいもの……ですか」

そうよ、と言って少女は怪しげな笑みを浮かべる。

「もうすぐここに外来人が来るわ。彼を私の部屋まで連れて来てちょうだい」

「それはよいのですが、その外来人の特徴を教えてください。侵入者と見分けがつかみませんので」

「……それもそうね」

女性の言葉に頷くと、少女は椅子に深く座り直し、目を閉じる。

しばし沈黙した後、少女が口を開いた。

「……見えたわ。身長は割と高めの男。髪は少し癖つけのある黒。目も黒くて、格好は……ブレザーって言うのかしら、永遠亭の月の兔と似たような服。そして名前は……宮坂結ね」

かしこまりました、とだけ答えたメイドの女性は、現れた時と同様に突然音もなく消え去った。

プロローグ（後書き）

短めプロローグ。

誤字脱字はご指摘下さい。

ご意見ご感想もぜひご返信下さい。

第一話 幻想入り始めました

事の発端は、ある晴れた日のことであった。

時は夕方、部活帰りの俺は翌日から連休ということもあって機嫌がよく、鼻歌交じりに家路を歩いていった。

自分の家に何が待っているかも知らずに……

やっとこさ家にたどり着いた俺は、玄関の鍵を開け、中に入った。

「ただいまぁ」

何の変哲もない帰ったときの挨拶。俺は一人暮らしだから返事が返ってくるはずもないのだが、

「お帰りなさい、あなた。ご飯出来てるわよ」

この日は違っていた。居間に紫色のドレスと金髪が特徴的な、見ず知らずの女性がいたのだ。

俺はすぐにケータイを取り出して開き、すかさず三桁の番号を入力、からの通話ボタンを連打。この間三秒。

「もしもし、警察ですか？ 家に帰ったら空き巣が……」

ズガンッ！

ん？ 何の音だ？

謎の音と共に通話が切れた。

間違えて通話終了のボタンを押してしまったのかと思い、もう一度掛けなおそうとするとケータイを耳から離すと、液晶に風穴が開いているのを発見。

振り替えると壁に深く突き刺さったボールペンが。

恐る恐る居間の方を見ると……机の上に置いていたボールペンをダーツのように構える先の女性がいた。

……さっきのはあいつがボールペンを投げた音か？ 投げたボールペンがケータイを貫いて壁に突き刺さったっていうのか？ そんなばかな事があってたまるかよ！
とは思いつつ、内心ガクブルである。

いや、よく考えたら人間にそんな馬鹿力があるはずがない。そう
だ、

「まだお前がああのボールペンを投げたっていう証拠はな……」

ズガンッ！

一縷の望みをかけた俺の言葉はさっきと同じような音に容赦なく
かき消された。

ちなみに、今のは女性が投げた（というより発射された）ボール
ペンが俺のすぐ横にあったテレビを貫き、そのまま壁をぶち抜いた
ていった音だ。

驚きで口をあんぐりと開けたまま、穴の開いた壁から女性に視線
を戻すと、彼女は既に次のボールペンを構えていた。

いやいやいや、ありえないから。テレビぶっ壊すとか冗談だろ？
だいたい誰だよボールペン二本も三本も机に置きっぱなしだった

奴は（注 もちろん俺です）あ、ボールペンなくてもあの腕力なら素手で人間を百メートルぐらい吹き飛ばせるか。そうかそうか、こいつはいつでも俺を

殺せるのか

そんな最悪な結論に至った瞬間、ぶわっと全身から汗が吹き出すのを感じた。

頭が逃げると命令を出す、足が床に縫い付けられているかのようには動かない。

今なら銃を突き付けられた人質の気持ち分かる気がする。突き付けられてるのボールペンだけだ。

十七年の人生で初めて感じるリアルな命の危機を前に、俺はただただ立ち尽くすしかなかったのだ。

「そんなに警戒しなくてもいいわ。元々あなたに危害を加えに来たわけではないし、ケータイを壊したのも他の人が来ると面倒だったからだしね」

ついでにテレビ撃破はノリよ、と付け加えつつ、女性は構えていたボールペンを下ろした。

当面の命の危機は免れたと考えて、俺はほっと安堵した。実際状況はあまり変わっていないというのに。

「ああ、まだ挨拶してなかったわね。初めまして、宮坂結くん。私

の名前は八雲紫よ。気軽にゆかりんって呼んでね」

と、ウインクしながら自己紹介する女性。もとい、ゆかりん。

なぜ俺の名前を知っているのか？

ボールペン投げには何かタネがあるのではないか？

どうしてそんな奇抜な格好をしているのか？

様々な疑問が俺の頭に浮かんだが、とりあえず最初に聞きたいことがある。

「一体お前は何者だ？ 何が目的なんだ？」

「お前、ねえ。ゆかりんでいいって言ったのに、聞こえなかったのかしら？」

と不機嫌そうな返答が返ってきた。

なんだコイツ。と思ったが、言わないでおこう。機嫌を悪くしてボールペンの悪夢が復活でもしたら目もあてられない。

「まあいいわ。えっとまず私が何者かってことだけど、今は答えられないわ。そして、ここに来た目的だけど……」

あなた、異世界に行ってみたくない？」

……え？ はい？ 聞き間違いか？

異世界がどうか聞こえたが。うん、気のせいだ。きっと気のせいなんだ。

「よく聞き取れなかったからもう一度お願いできますかね」

「あなた、本当に耳大丈夫？ 異世界に行ってみたくないかって聞いたの」

……聞き間違いではなかったようだ。

さて、どう答えたものか。

異世界なんてあるはずがない、って言うのは簡単だ。ただ、相手が何をするか分かったもんじやない以上、あまり機嫌を損ねたくはない。

俺の耳はお前の頭よりは正常だ！ と叫びたい衝動をkaroujite抑え、俺はこの場を乗り切るべく、いまだかつてないほどの集中力で無難な回答を考える。

が、その作業は

「ま、あなたがどう答えようと結果は変わらないんだけどね」

というゆかりんのセリフと共に、俺の足下の床が突如消えることで終わりを告げる。

「なら聞くなやあああああああああああ！」
もちろん、人間は重力には逆らえないわけで、俺の叫びもむなしく体の方は自由落下を開始。

多数の目がつごめく謎の暗い空間をただただ落ちていった。

ようこそ幻想郷へ

そんな声が聞こえた気がした。

第一話 幻想入り始めました（後書き）

グダグダな上に主人公が幻想入りしただけっていうね。ここまでブ
ロローグにすればよかった。

第二話 二つはどいつ？

目が覚めたら、そこは森の中だった。

テンプレだな、自分がそうなるとは思わなかったが。

「うん、ここはどこだ？ 何で俺はこんなところで寝てんだ？」

あ、思い出した。確か家に帰ったら八雲とか名乗るうさんくさい人がいて、何か言ってたな。確か、異世界がどうかだったかな。そうだ、その直後に謎の穴に落ちて……今に至ると。

つまり、俺は今まさに異世界にログインしているっことか？

「なんだよそれ……ばかばかしい」

先の予想を速攻で否定、異世界だなんて非現実的すぎる。

ひょっとして超リアルな夢かも、と淡い期待を持ちつつ頬をつねる。普通に痛かった。つねり損だ。

「うがああ、もう何だよこの状況！」

この時点で俺の脳はパンク寸前。八雲とか言う奴を目の前にした時から理解出来ないことが立て続けに起こったのだ、そうなるのも無理はない。

むしろ、今まで冷静だったことを褒めてほしいぐらいだ。

「ああもうわけが分からねえよ！ 何で俺がこんな目に合わなくちやいけねーんだ！」

って叫んだものの、事態は一向に好転しないのは目に見えている。落ち着け、落ち着け自分。こんなときこそ冷静になるんだ。

深呼吸をすること十分余り、ようやく落ち着いてきた俺は、何か位置を特定する手がかりがないか辺りを見回す。

しかし、360°どこを見てもうっそうと生い茂る木々しかない。森だから当然か。

わりと深い森のようで、生い茂る木々に太陽光は阻まれ薄暗く、若干霧がかかっていることも相まって視界は最悪、遠方は見えない。

次に持ち物確認。

制服のポケットから出てきたのは

- 1 軽い財布
- 2 充電切れ音楽プレイヤー
- 3 穴の空いたケータイ

役に立つものは無いな。全く俺は学校に何しに行ってるんだ、方位磁針ぐらい持ち歩いとけよ。

「とりあえず、適当に歩き回って見ようか。」

なんたつてここは未知の森だ。熊や蛇に襲われたつておかしくはないし、明かりがないので夜は動けなくなる。せめて日が沈むまでには安全な所に行きたいと考えた結果、移動することを決意。

一ヶ所でじつとしてたつて助けがくる保証は微塵もないしね。

俺は、遭難時のセオリー（その場から動かない）を無視し、歩き始めた。

森の中をさまよい始めてから数十分たった頃、俺はただひたすら全力で走っていた。なぜなら、

「俺だってさ、熊ぐらい覚悟してたよ。でもさ、

日本の狼って絶滅してたんじゃないのかよ！」

運悪く狼の群れに遭遇したからである。

オリンピック出場できるんじゃないかと勘違いするほどの速度で疾走していると、視界の端にちらりと紅い洋館が見えた。

霧はいつの間にか晴れてたみたいだ。

「あそこだ、あそこに避難するぞ！」

俺はすぐに走る向きを修正、洋館までまっしぐら。都合良く森が終わり、視界が少しひらける。元々森の入口に建てた洋館のようだ。洋館まであと数百メートル。

狼との距離が気になって、一瞬だけ振り返ると……

「あれ？」

なぜか追って来ていなかった。それどころか何かに怯えるように走り去っていったのだ。

「あいつら、何で逃げたんだ？ この辺りに天敵でもいるのか？」

この予想は当たらずとも遠からず、実に惜しいものであるが、それが分かるのはもう少し先の話。

「ま、まあ助かったならそれでいいか」

避難の必要はなくなったが、洋館に行くことにした。誰かが住んでるなら、ここがどこだか聞けるし。

俺は息を整え、急に痛みだした足を引きずって洋館へと向かう。

やっぱり足の限界はとっくに越えてたみたいだ。

やっとの思いで洋館の門にたどり着いた。

近くで見ても洋館は隅から隅まで紅く、主の趣味の悪さが伺える。そして、さらに俺を困惑させたのは門の前に立つ、おそらくは門番であるつ女性だ。

一つの星を掲げた緑の帽子に同色のチャイナドレス、紅く長い髪

を両サイドでみつあみにし、肩に垂らしたその女性は、あるうことが立ったまま寝ていた。

あまりに幸せそうに寝ているのでためられるが、起きるまで待つのも面倒なので起こすことにした。

「もしもし。起きてください。もしもし」

「咲夜さん、今日はコッペパン二個もあるんですかあ？　ありがとうございます」

ダメだこいつ。寝言言ってやがる。ってかこいつ毎日コッペパンひとつで働いているのか？

急に彼女が不憫な人に見え始めた。

「ってそうじゃなくて、起きてください！　道をお尋ねしたいんですけど！」

今度は肩を強く揺すってみる。しばらく揺すつてると、いきなり門番（仮）は目を開き、そのまま流れるように土下座した。

「すみません咲夜さん！　いえ、私は断じて寝てません！　ちょっと、ちょっとだけうとうととしてただけなんです！　だからナイフだけは、ナイフだけはお許しを！」

「あの……俺、咲夜って人じゃないんですけど」

いったいどんな人なんだろう、その咲夜さんって。

コッペパンひとつで働かせ、時折ナイフをちらつかせる。まるで

悪魔だ。

俺のセリフを聞いた途端、門番（仮）はガバツと顔を上げ、俺の顔を数秒凝視。その後、無言のまま立ち上がり、なぜか身構えた。

「私を騙して紅魔館に侵入するつもりだったんですね。ですが残念でしたね。紅魔館が門番、紅美鈴の目の黒いうちは不審者なんて一人たりとも通しません！」

本当に門番だったみたいだな、そして、盛大な勘違いもしてるよ
うだ。

「あの、俺はただここがどこかを聞きに」

「問答無用！」

容赦なく飛ぶ門番の拳。頬を掠めつつも、俺は間一髪でそれをかわした。奇跡だ、ミラクルだ、もう二度と避けれまい。

俺は二発目が来る前に回れ右して逃走開始。既に足が悲鳴を上げているが背に腹はかえられない。

「逃がしません！」

華符『芳華絢爛』」

門番が何か叫んでるが無視だ無視……

「うがつ！」

とか思ってたらずがもつれて顔面から転んでしまった。

急いで起き上がり振り返ると、宙に浮いた色とりどりの光る球が

こちら目がけて飛んできていたわけだ。
その数、いち、に、じゅう……たくさん。
もう意味が分からない。

「何だよこれ……」

あの球に当たってはならない、と脳が本能的に警鐘を鳴らすが、
悲しいかな、もう足が言うことを聞かない。

「ああ、もうだめだな。これでも粘ったほうだろ、うん。来世から
本気出すよ」

完全にあきらめモードである。

「幻符『殺人ドール』」

しかし、その光る球は謎の声と共にどこからともなく現れた大量
のナイフによって、全て撃墜された。

「あなたは宮坂結さんでよろしいでしょうか？」

「え？ あ、はい。そうですけど」

いつの間にか目の前にいたメイド服の女性からの突然の質問に戸
惑いながらも答える。

さっきから何でもありだな。常識なんて丸めてゴミ箱にでも捨て
た方がいいかもしれない。

「咲夜さん、どうして邪魔するんですか！ 不審者を追い返すのは
門番の役目でしょう！」

メイドに食って掛かる門番。

あ、このメイドが噂の咲夜さんか。

メイドはため息をひとつついてから門番に言った。

「この人は外来人、紅魔館を知らないのは当然よ。
どうせあなたは

『不審者を捕まえたら起きて働いていた証拠になる。昼寝していたことはばれないし、ばれても不審者を捕まえた功績で帳消しになるに違いないっ』

とか考えてるくに話も聞かずに襲ったんじゃないのかしら？」

「うっ、それは……」

おい、凶星かよ。俺はそんな理由で襲われたのか。

後でお仕置きね、っと言って咲夜さんは俺の方に向き直る。

スカート短めのメイド服と銀色の髪に目を引かれる。髪形は門番と似ているが、彼女の方が髪は短いし、帽子の代わりにカチューシヤをしている。凜とした雰囲気から彼女が喫茶店のなんちゃってメイドではなく、本物のメイドだということが感じられた。本物のメイド見たことないけど。

「見苦しいところをお見せしてしまって申し訳ありません。お嬢様がお呼びですのでどうぞこちらへ」

と言って、さっさと門の中に入って行ってしまった。

謎の光る球とか、突然現れたナイフとか、なぜか俺の名前を知っていたこととか、もう考えるのはやめよう。どうせ分からないし、

気が狂いそうだ。

それに、なんか主の所に連れていってくれるみたいだ。そいつに道だけ聞いてさっさと帰ろう。そうだ、それがいい。

俺はうなだれている門番の横を通り過ぎ、メイドに着いて行くことにした。

第二話 二二二はど二二？（後書き）

読めば読むほど分かる作者の文才のなさ。

その文章力は図書委員会報の原稿で一人だけはねられたほど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4482y/>

東方結界伝

2011年11月20日13時01分発行